

## 第4回 地域福祉計画策定委員会 議事録

### ○日時

平成26年8月20日（水）10:00～11:40

### ○場所

小郡市役所 本館3階会議室

### ○協議事項

- 地域福祉計画の中で取り上げる課題の確定と施策の方向性について

### ○協議内容

会長のあいさつの後、事務局より、地域福祉計画に関わる経過報告、ならびに調査を踏まえ検討すべき課題の方向性についての説明を行った。

その後、会長による議事進行により、以下のような協議が行われた。

（会長）

- ・地域にとって、小郡市にとっての安心について考えてもらいたいと思う。「地域にとっての安心」がひとつキーワードになると思う。それともう一つ、地域福祉のあり方を考える際、社会福祉法の枠組みを越えたところでみていかなければならない、そんな時代になっているのではないかと個人的には考えている。皆さんのご意見をうかがいたい。

（委員）

- ・児童の面からいえば、たとえば、子どもがいなくなった時に声をかけてもらえるような、「あそこにいたよ」といったことなど、ご近所とのつながりが少なくなっているように思う。また、核家族が増えてきたこともあってか、たとえば、マンションなどでは互いのコミュニケーションが少なくなっていると思う。市内にショッピングセンターができて、その中に情報提供するようなところもあるけれど、たとえば、そのようなところが、気軽に話ができるような場となればいいと思う。

（委員）

- ・私が住む区に若い人達が、どうやったら住んでもらえるだろうか、といったことを考えている。まずは環境の整備だと思っている。清掃活動などを通じてきれいな環境を整えることが大切だし、生活の利便性を高めることも大事だと思う。また、安心して生活してもらうために、たとえば、通学路にあたる横断歩道などには老人クラブをお願いして交通安全に心がけている。夏祭りなどの行事を通じて、地域に親しんでもらうといった取り組みも大切かと思う。

（会長）

- ・環境という言葉が出てきたが、地域福祉のなかで、環境のことは考えていくのか。

（事務局）

- ・環境という言葉の範囲はとても広い。そのなかで、市民の福祉の向上という意味合いのなかで、環境の改善が必要、たとえば、生活に関わる環境の改善ということであれば、地域福祉の範疇に入ってくると思う。

(会長)

- ・そのような視点と同時に、委員から指摘のあったきれいなまちづくりといったことも大切だと思う。イギリスの美しい田園風景のようなものが小都市にあれば、若者が移り住んでくれるだろうし、そのなかに、福祉や介護の担い手となってくれる人達の居住が期待できるはずで、そのような発想で考えていくことも大切ではないだろうか。

(委員)

- ・先ほども話があったが、地域での結びつき、つながりが大切だと思う。ゆりかごから墓場までという言葉があるが、小都市に住んで本当に良かったと思えるような、そんな小都市になればと思う。

(委員)

- ・これまでの話とは逆の表現でいえば、無関心が増えているのではないか。そのために、子育て中の家族や障害のある人達や認知症の人達などが住みにくくなっているのではないか。

(委員)

- ・安心安全とよくいわれることだが、とても難しいことだと思う。先ほどの話ではないが、無関心な人、地域のために汗をかくことになかなか参加してもらえない状況があって、いつから、どうしてこのようになってしまったのか、よく分からないが、こんな中で地域の安心安全を考えていくことは大変なことだ。

(会長)

- ・小都市のことを地政学的にみると、山間部はなく平坦で、西鉄の駅も7つもあって、都会のように大きな歓楽街もなく安全だし、言葉は悪いかもしれないが、とても管理しやすいところ。このようなところでの地域福祉の成功は、先進的な事例となるはずで、逆にこのようなところもうまくいかないということであれば、どこでやるんだ、ということにもなる。広義の福祉ということになるかもしれないが、このような視点も大切だと思う。

(委員)

- ・老人クラブなどが成立していないところが増えてきているように思うし、先ほどからも話が出ているように地域のお世話をすること、地域のために汗をかくといったことに参加する人達が減ってきているように思う。

(会長)

- ・地域でのコミュニケーションの問題かと思うが、そのために行政が何らかの対策として大きな網をかぶせようとしてもなかなかうまくいかない時代、住民の側からのボトムアップが必要な状況になっていると思う。また、民生委員・児童委員や区長もそうであるが、大きな負荷がかかっている。したがって、既存の担い手による役割分担では、立ち行かなくなっているように思うし、そのためにどのような形にしていくのか。ここのところは、行政の方でもしっかりと考えていく必要があると思う。

(委員)

- ・たしかに、地域での活動に参加するということは面倒くさいこと。ただ、昔のように、というのは難しいことかもしれないけど、一旦行政の方で担うとされたことであっても、限られた予算と人のやりくりのなかでは、地域の人達同士で力を出し合ってやっていくところはやっていけないといけないのかもしれない。相互扶助ということ。たとえば、高齢者のサロンと子どもたちのサロンをいっしょにやって、高齢者のための食事を若いお母さんたちが作って、その間は高齢者の人達が子ども達の面倒をみる、といった取り組みを考えてもいいのではないかな。

(会長)

- ・そのような発想は大切だと思う。行政での分野ごとの縦割りの発想では、そのような取り組みは難しいかもしれない。

(委員)

- ・安全ということで、障害のある人達にかわっている立場から考えてみた。あすてらすができて10年になるが、当初、そこでの障害のある人達は敬遠されていたが、今では声かけがあって、慣れというか余裕をもってかかわってもらっていると思う。このような変化が大切ではないかと思う。ただ、ボランティアでやってきている高校生が、専門学校や大学で学んだ後、小郡市に戻って就職しようと思っても、働く場がないという状態だ。その一方で、先日障害福祉関係の事業所の人に、誰かいい人はいないか、との相談を受けたが、障害福祉の分野での人材がなかなか見付からないという現状もある。それと、調査の結果から、市民の人達が障害のある人達のことについて、あまり知らないという実態があるということには、ちょっとびっくりしている。

(会長)

- ・何かの集まりを企画する時、どうしても高齢者のためのもの、障害のある人達の会、といった形になりがち。これは行政とともに、私達にとっても課題であるのだが、そのような分野別の集まり、といった形ではないものを考えていくことも大切だろう。

(委員)

- ・安心ということを考えて時、私自身はあまり不安を感じない。周りに自分より若い人もいれば年寄りもいて、それなりのつきあいもあるから。逆に、安心に対して不安になってしまうというのは、周りの人達とのかかわりが乏しいからではないだろうか。たしかに、それは個人的な問題かもしれないけど、昔のことを思えば、地域に世話好きの人がいて、その人が何か口を出してくれていた。そんな存在が今となっては貴重なのかもしれない。今はその役割が区長であったり、民生委員・児童委員なのだろうが、先ほども話があったように、このような人達は大変忙しくて、なかなか会うことができない。そこに行けば、かならずいて、話を聞いてもらえ、相談に乗ってもらえる、といった人が地域にいるということが安心につながるように思う。

(会長)

- ・戦後、日本がたどった道は、村的な結合、結びつきの崩壊を招いたと思う。昔のように戻るということは難しいことだが、村的な結合の復権をめざす、ということは大切。問題は

それをどのような形で、誰がやっていくのか、ということ。このようなことを考えていく必要があると思う。

(委員)

- ・福祉というのは、幸せに暮らすということかと思う。地域で安心して暮らす、暮らせるということであるが、安心の逆を考えてみるとそれは心配であろう。では、皆さんどのようなことが心配なのだろうか、と考えてみた時、一番大きいのは、相談相手がいないということかと思う。たしかに、経済的な問題等、他にもいろいろあるかもしれないが、大切なことを相談できる相手がいないということは心配なことで、それは、たとえ家族に囲まれて暮らしていたとしても、そこであまり話ができない状態ということであれば、心配だし、ひとり暮らしをしている人達は、そのような心配がより強いはず。話し相手がいること、誰かとのつながりがあるということは、安心ということを考えた時に、大切なことではないかと思う。

(会長)

- ・子育て中の不安を解消する取り組みは、何かあるのか。

(事務局：担当課長)

- ・市内4か所に子育て支援センターを設置して、相談支援等に当たっている。また、自治公民館に出向いて、相談支援等に当たる取り組みも進めている。

(会長)

- ・相談支援にあたる人に民間ボランティアはいないのか

(事務局：担当課長)

- ・民間のボランティアはいない。

(会長)

- ・子育て支援センターを設置し、活動すること自体、良いことだと思うが、これから市の職員だって増員は見込めないはずで、そこに民間のボランティアの人を活用するといった、これまであまり試みられてこなかったやり方も考えていくことが大切になってくると思う。そのようななかで、先ほど話があった身近な相談相手について、対応していくことができ、ひいては不安の解消にもつながっていくのではないだろうか。

この後、事務局より、調査結果を踏まえた課題整理の内容についての概要を説明した。

(会長)

- ・説明の中で虐待という言葉が出てきたが、この言葉の定義について、庁内で議論し統一的な見解が示されているのか。

(事務局)

- ・高齢者や障害のある人、また児童に対する虐待については、厚生労働省が定めるそれぞれの定義があるが、それに従った形で小郡市においても考えていきたい。

(会長)

- ・アンケートによる調査では、いわゆるサイレント・マジョリティやサイレント・マイノリ

ティ（意見を表明しない、できない多数派・少数派）が存在する、そのようなバイアス（偏り）がデータの中にはみられるということを踏まえておくことが大切で、その上で、分析にあたる行政の方でも、そのような声なき声に対する気づきみたいなものが大事になってくると思う。

（委員）

- ・介護保険制度の改正にともない、来年度 27 年度から要支援 1、2 の人達のサービス利用について、介護保険給付から市町村が実施する事業へ移行するなど、大きな動きが生じることになっている。このことは、全国一律の制度改正ではあるけれども、そこでは地域の実情に応じて、地域の皆さんの力を活用しながら、これまでにない多様なサービスが展開される可能性も秘めている。国や県、近隣市町村の動向によるところもあるかと思うが、小郡市ではどのように考えているのだろうか。

（事務局）

- ・地域福祉計画の視点からは、たとえば、ボランティア活動の推進であるとか、地域福祉を担う人材の育成といった取り組みなどについて議論を深め、メニュー化できれば、と考えているところ。

（事務局：担当課長）

- ・要支援 1、2 の人達に対する介護予防訪問介護と介護予防通所介護については、市が実施する地域支援事業の中で実施していくことになるが、その担い手については、混乱を軽減することもあるとあって、当面は現在これらのサービスを実施している介護保険事業所に、サービス提供を委託することとし、地域の皆さんの力をお借りする部分については、その内容を検討しながら、そのための人材育成も図りつつ、進めていきたいと考えているところ。

（会長）

- ・地域福祉計画にとっても大変重要な制度変更になると思う。今の説明では、過渡的にはいわばソフト・ランニングをめざしているということかと思う。次回の委員会では、その点の計画内容について示してもらいたい。

（委員）

- ・小郡市では、協働のまちづくりを推進しているところ。そこでは、各部会を設け、取り組んでいこうとしている。事務局からの説明では、地域に受け皿を求める、受け皿のためにボランティアを募るといったことを考えているようだが、そんなに簡単にいくものだろうか。協働のまちづくりでも、地域において工夫を凝らしながらボランティアの募集、人材の確保に努めているところだが、なかなかうまくいかない、というのが現状。果たして、大丈夫だろうか。

（会長）

- ・現実的なところでの指摘だと思う。たしかに、担い手となる人を確保することは大変困難になってきていて、たとえば、病院や施設で介護職を募集しても、応募者がゼロという状態。そのようなことから、若者の移住を進める取り組みは重要で、そのなかから、介護や福祉の担い手となってもらえる人達を確保していく必要があるように思う。

（事務局）

- ・担い手不足、担い手の確保のことは、とても大きな課題だと認識している。ここでポイントのひとつになると考えているのは、意識の問題もあると思っている。同時に、小都市には、定年退職され、第2の人生をどのように過ごそうかと考えている人達も多く存在している。そのような人達を上手に活用できるような仕組みづくりが大切になってくると思う。また、個人ボランティアだけではなく、企業や団体から募るようなボランティアもあるはず。地域での受け皿となるような市内のあらゆる社会資源を考えながら、進めていければと思う。

(会長)

- ・一度に何かを進めるということは、なかなか難しいところ。何か成功モデルになるような取り組みに、まずはチャレンジしてみることも大切かもしれない。

(委員)

- ・ボランティアについては、50歳代、60歳代が中心で、それよりも若い人達はなかなか参加しようという人が少ないというのが現状かと思う。また、この年代であっても、男性は少ない。定年や定年間近の人達について、地域デビューのことが言われるが、ボランティアを募る、人材を確保するという意味から、50歳代くらいの人をターゲットにしたボランティア講座を開催することもいいかもしれない。特に男性は、会社で働いていた時に培った組織の中で働く、組織力を活かす、といったことに長けているはずで、このような点は、女性中心のボランティア組織ではちょっと弱いところ。これまでに培ったスキルを活かせるような形のボランティア活動になればいいのではないだろうか。また、有償ボランティアやポイント制によるボランティア活動についても考えていいのではないか。頼む側からすれば、その方が頼みやすいかもしれない。

(会長)

- ・ボランティアについての意見がたくさん出てきたが、市の中でボランティアに関しては、どこが管轄しているのか。それがないのであれば、たとえば、市の中にボランティア課みたいなものを作って、進めていけないといけない時期に来ているのではないだろうか。ボランティアやボランティア組織をつないでいくような、そんな役割を担うことが必要。また、買い物ボランティアには小郡の物を買ってもらい、そこに商工課も巻き込んでいく、といった視点になれば、商工課のことですら福祉のことになってしまう。そんな大きな視点で小郡市全体の活性化につながるような取り組みを進めていくこと、それらを掌握するようなことが大切になると思う。

(委員)

- ・市のそれぞれの課が、ボランティアの人達や組織とは関わりをもっているけど、隣の課がどんなボランティアとどんな関わり方をしているのか、よく分かっていないというのが現状だと思う。また、ボランティアについては、社会福祉協議会の役割も大きいと思う。

(委員)

- ・ボランティア情報センターについては、あまり機能していないかもしれない。まず、場所が悪いように思う。分かりやすいところにセンターを設置することが大切だと思う。また、福祉に関わるボランティア以外にも、たとえば、生涯学習に関するボランティアなどもあ

るけど、ボランティア情報センターでは、あらゆるボランティア活動についての情報を、一括して取り扱えるようにしていかなければいけないと思う。

(会長)

- ・ボランティアのことについても、先ほどから話しているように、成功モデルを作っていくことが大切になってくると思う。

(委員)

- ・災害時要援護者のことについて、要援護者の名簿の整備は、まだ十分に整っていないと思う。ただ、ここで問題なのは、この名簿をどのように管理していくのか、ということだと思う。

(会長)

- ・そのことも大切なところだが、災害が比較的少ない小郡市のことを考えると、他の地域で災害に遭った人達の受け入れのことも大事かもしれない。その点も踏まえて、災害対策については考えていかなければいけないと思う。

(事務局)

- ・災害時要援護者についての計画は、協働推進課が所管しているところで、要援護者の名簿の管理等については、そこでの計画に盛り込まれることになっている。また、そこでの計画と地域福祉計画との間で整合性を図っていくことになる。

(会長)

- ・両計画については、ボランティアをキーワードにするならば、うまく結びつくようにも思える。

最後に、事務局が示した地域福祉計画の策定にあたっての方向性について承認され、副会長のあいさつ、事務局からの今後のスケジュールの説明の後、委員会は終了した。